Q&A 肺炎球菌：あなたが知っておくべきこと

2017年秋号
第1巻

肺炎球菌(pneumococcus) と呼ばれる細菌に関して考えることはなくても、多くの人がその影響についての知識を持っている可能性があります。幼いお子さんを持つ方であれば、少なくとも1回はお子さんの耳感染症の苦難を乗り越えられた方が多いのではないでしょうか。幼いお子さんの耳感染症100例のうち7例は肺炎球菌が原因となっています。同様に、高齢者や、親の介護をする成人の方であれば、快方に向かっていると思ったら、急に症状が悪化したり、「肺炎に移行したりする」長期的な呼吸器感染症について、見聞きされていることがあるでしょう。「急な悪化」は、肺炎球菌の日和見性に起因することが一般的で、インフルエンザのようなウイルスに感染した後の免疫低下に乗じて肺炎球菌が肺に侵入し、重症肺炎を引き起こします。この連続して生じる感染の経緯により、多くの高齢者がインフルエンザの時期に肺炎で亡くなる理由と、インフルエンザと肺炎球菌の両ワクチンがこのハイリスク層を守るために重要である理由の説明がつきます。

Q. 肺炎球菌疾患とはなんですか？

A. 肺炎球菌感染症は肺炎連鎖球菌として知られる細菌グループが原因となっています。数種類の肺炎球菌が存在し、その多くが人の感染症を引き起こします。肺炎球菌は耳、副鼻腔、脳、脊髄（髄膜炎）、肺（肺炎）または血流（敗血症）の感染症につながることがあります。

Q. 肺炎球菌疾患はどんな症状を認めますか？

A. 肺炎球菌疾患の症状は感染部位によって様々であり、咳、息切れ、胸痛、発熱、血性粘膜、耳痛、頭痛または項部硬直（首のこわばり）が含まれることがあります。

Q.肺炎球菌疾患は危険ですか？

A. 大半の肺炎球菌感染症は軽症ですが、中には重篤であったり、致命的であったりするものさえあります。副鼻腔と耳の感染症は最も軽症のものに属します。髄膜炎、敗血症および肺炎は、より重症となる傾向があります。

Q. 誰が肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？

A. 肺炎球菌結合型ワクチンは2歳未満の全ての小児と、65歳以上の全ての成人に推奨されます。65歳以上の成人は、肺炎球菌結合型ワクチン接種後、少なくとも1年空けて1回の肺炎球菌多糖体ワクチンの接種も受けるべきです。

心臓、肝臓または肺に慢性疾患（喘息を含む）を有する方、糖尿病、癌、HIVまたは他の免疫低下症状を有する方および喫煙者など、一部の方は肺炎球菌感染の大きなリスクがさらに高まります。上記の推奨は年齢と状況に基づいているため、あなたやお子さんに単独または両方の肺炎球菌ワクチンが必要であるかをかかりつけ医と相談してください。

Q. 誰が肺炎球菌ワクチンの接種を避けるべきですか？

A. ワクチンの成分に重症のアレルギー反応がある人は、接種しないよう推奨される可能性がありますが、このワクチンの相対的な危険性と利益についてかかりつけ医と相談してください。

Q. 肺炎球菌ワクチンはどのように製造されていますか？

A. 肺炎球菌ワクチンは糖で覆われた（多糖体）肺炎球菌を使用して製造されています。2種類の肺炎球菌ワクチンが入手可能です。ワクチンは、防御する肺炎球菌タイプの数と、「ヘルパー」蛋白の有無という、2つの重要な点が異なっています。多糖体肺炎球菌ワクチン（PPSV23と呼ばれることが多い）は、23の肺炎球菌タイプを防御し、「ヘルパー」蛋白を含みません。2歳未満の小児は多糖体への強い免疫反応を生じないため、乳幼児へのPPSV23の接種は通常推奨されていません。

代わりに、乳幼児には「ヘルパー」蛋白を含むワクチンの接種が推奨されています。結合型ワクチン（PCV13と呼ばれることが多い）として知られており、この種類は13の肺炎球菌タイプを防御します。一部の子供は肺炎球菌感染症のリスクが高まる症状を有するため、また多糖体ワクチンはさらに10の肺炎球菌タイプを防御するため、肺炎球菌のリスクが高い一部の子供には、両方の種類の接種が推奨されています。あなたやお子さんにとってどれが最良であるかを知るために、かかりつけ医と相談してください。

続く>

Children's Hospital of Philadelphia®
Vaccine Education Center

詳細情報：vaccine.chop.edu

Q&A 肺炎球菌：あなたが知っておくべきこと

Q. どの程度の頻度で肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？

A. 乳幼児は、2、4、6か月と、12〜15か月の間に、4回の結合型ワクチン接種を受けます。

以前に肺炎球菌ワクチンを接種していない65歳以上の成人は、1回の結合型ワクチン接種を受け、その1年後に多糖体ワクチンの追加接種を1回受けるべきです。以前に肺炎球菌ワクチン接種を受けた人は、適正な接種回数について医療提供者と話し合ってください。

加えて、リスクが高い2〜64歳の子供と成人は、適正な接種回数の確認のために、医療提供者に相談してください。

Q. 両方の種類の肺炎球菌ワクチンの接種を受ける必要がありますか？

A. 65歳以上の大半の成人に、両方の種類の接種が推奨されています。2つ目の種類（PPSV23）は、追加の肺炎球菌株を防御することにより、防御力を増強します。

Q. 許容できる最長接種間隔はどのくらいですか？

A. 2種類のワクチンの間に最長接種間隔はありませんが、最低1年間隔を空けるべきです。

Q. 肺炎球菌による肺炎の既往があっても、肺炎球菌ワクチンの接種を受けるべきですか？

A. はい。既に肺炎球菌による肺炎に罹患したことがあっても、多くの肺炎球菌タイプが感染の原因となるため、65歳になった時点で両方の種類の肺炎球菌ワクチンの接種を受けることが推奨されます。

Q. 肺炎球菌ワクチンの接種を受ける危険性と利益はなんですか？

A. ワクチンは、接種部位の発赤、疼痛、腫脹や、発熱または筋肉痛を生じることがあります。

肺炎球菌による感染症は、入院や死亡の原因となる可能性があるため、ワクチン接種の利益は明らかに危険性を上回ります。

高齢者の方は、快方に向かっていると思ったら、急に症状が悪化する長期的な呼吸器感染症について、見聞きされていることがあるでしょう。「急な悪化」は、肺炎球菌の日和見性に起因します。

この情報はChildren's Hospital of PhiladelphiaのVaccine Education Centerによって提供されています。当センターは親御様や医療専門家の方々のための教育情報源であり、感染症の研究および防止に注力する科学者や医師、および親御様から構成されています。Vaccine Education CenterはChildren's Hospital of Philadelphiaの基金教授陣によって資金提供されています。当センターは製薬会社からの援助を受けていません。

Children's Hospital of Philadelphia®
Vaccine Education Center

詳細情報：vaccine.chop.edu

©The Children's Hospital of Philadelphia · 18VEC0148/NP/11-17
17004-07-17